

碧あおの大地

神崎 悠依

その十二月も暑かった。

汗ばむほどの陽気に何もする気が起きず、甲板の日陰に寝そべっていた。最初の異変は、長く降り続いていた雨があがったことだった。次にふつと風が止んだと思ったら、ごうんという衝撃が来たのだ。またどこかにぶつかつたのかしらと舟べりへ駆けてゆくあいだにも、その違和感はやってきた。この「舟」の上で一度も味わったことがないような感覚に襲われている。言い換えれば、いつも感覚がない。足下をとりまく浮遊感とでもいうものが。

辿り着いた舟べりで、遠い海面を見下ろしたときの衝撃は忘れない。船腹から早くも降り立つていく人々が、驚くことに海の上を歩いていたのだ。よく見るとそれはしかし海ではなかった。濁った緑の海水の下に、どこまでも続くともしれない黒いコンクリートが透けて見えているのだった。

父はそれを山岳文明の名残だといった。

「むかし、海面の上昇をどうしようもないと気付いた先祖は次々首都を高地へ移したと聞くよ。十年くらい前にも一度こういうところに降りただけだね。……マナは忘れちゃったかな」

それはマナが物心つく前の話だった。

今や百人ほどが海面に立ち、船底からはさらに続々と人々が降りて眩しさに目をしかめていた。それにしても不思議なことに、ほかの「舟」と交流するときは甲板にさえ出ず底でじつと動かない老人たちが、今は多く顔を出している。心なしか生き生きしている彼らに比べ、若者は途方に暮れているようだ。

続いて船底から車高の高い車が幾つも降りてきた。

「ママたちは少し周りを見てくるから、おまえは家へ戻っていなさい」

「いや。あたしも行ってみたい」

「そんなこといったって、おまえ大人しくしていられないでしょう。危ないこともあるかもしれないのよ」

「じつとしてるから。連れてって、お願いパパ」

父は頼まれると断れないたちだったので、何があつても離れないという条件つきで許された。同行者は普段身の回りを世話する付き人のような男が選ばれた。彼のへつらい方がマナはそんなに好きではなかったけれども、探検に連れていってもらえるならそれくらい屁でもない。全員が乗り込むと車はかすかに浮き上がった。特殊な工

ンジンによつて、海面上数センチを飛ぶ車である。

未だ「舟」から降り続けている人々を尻目に、何台かの探索隊がそれぞれ違つた方向へ出発した。

車は海の上を延々と走つた。ときおり海面に建造物のなれの果てが顔を出していたが、ほとんどは崩れ落ちるか横倒しになつていた。

平らに思われた道も、進むにつれそうでもなくなつていった。やがて大きくせりあがつた道路の断面が行く手をふさいだ。左右百八十度、果てが見えないほどそれは続いていた。

男たちは通信機に向けて何か喋つたあと、荷物を背負うと崩れた足がかりに取り掛かり器用に登つていった。すぐに戻つてきた父は、車で待つていなさいといつた。けれどもマナはもちろん首をふつた。

「離れるなつていつたのパバよ」

この先がどうなつているのか見てみたい。それに、こんなところに一人取り残されるなんてまっぴらだつた。

「大丈夫、体力だつたら男の子にも負けないから」

しかしすぐに後悔しそうになつた。父にロープを垂らしてもらつたにも関わらず、そこを登るのは意外にぎつかつた。車を降り捨てたため徒歩になつたが、水の中を歩くのは体力が奪われる上に、断崖を越えてからは極端に起伏が増えた。まだ建つていた頃の面影が残る建物群

が多く、それを眺めるのは面白かつたけれども、高く昇つた太陽のせいでシャツは汗にぐっしょりと濡れた。しばらく歩き続けて未練がましく振り返つたが、もうとつくに「舟」の影は見えなかつた。

「おい」

見咎められたかと慌てて顔を上げると、大人たちが足下を見下ろして何か話し合つている。そうされて初めて、海に変化があつたことに気付いた。

どこからだろう、水の色が変わつている。見慣れた緑色ではなく、コンクリートを透かした紺色に服が浸かつていた。浄化した飲み水はもちろん緑色ではないが、こんなにも蒼が濃くはない。

戸惑いながらも歩を進めると、右手に何か見えた気がした。よくよく目を凝らすか何ものか判別はつかない。

「ねえパバ、あれ。何かあるよ」

「うん……？ 確かに。マナは目がいいな」

父は進路を修正してその何ものかへ向かつた。再び根気よく歩き続けて、ようやくそれが何なのか見当がついた。

「小屋だな、壊れていない。それと樹だ」

ただの樹どころではない、巨木だ。目測ではまだ距離があるのに、緑影は遠近感がおかしくなりそうなほど大きい。

一定の距離で彼らは立ち止まつた。マナにはこれ以上

近づいてはいけない気がした。こんなにも大きな樹は生まれてこのかた見たことがない。そのくせ不思議なことに濃い緑色がどこか懐かしく感じる。何か眩しかけたとき、それは降って湧いたように現れた。

離れた水面に柱が一つ立った。あとから気付けばそれは蹲っていた人が立ち上がっただけなのだったが、こんなところに人がいようとは思わなかっただけに、動くものの存在には皆ひどく驚いた。驚きより感動が勝つたのはマナだけだったらしい。大樹を背後に立った影は、淋しい廃墟の中だというのに何か綺麗だ。大海原に対してあまりにも彼は小さく、儚さが第一印象となった。

その絵に見惚れていたマナは、彼を人間と認識した父の声に呼び戻される。

「我々は旧ヨーロッパ領所屬、E 式地球船第三〇〇八号の者である。君は一体何者だ！」

言葉が通じるのかどうか不安な空気が流れる。彼は身構え一歩下がったようだ。代わりに一歩踏み出した父はその瞬間バランスを崩しかけ、うろたえて足下を見た。コンクリートは随分前から味気ない砂利に変わっていたが、それが今はどうだろう、ちょうど父が踏み入れた地点からずっと向こうまで茶けた大地が広がっているではないか。深い海の蒼に隠れてはつきり見えていなかった。

「あなたがたは」
少し囁れた声が届く。うまく声が出せないみたいに彼

は一度咳きこんで、今度はよく通る声で続きを発した。

「武器を持っていますか」

「危害は加えない。約束する。我々はただ探索に来ただけだ」

「捨てて下さい。話をするならそれからです」

大人たちは顔を見合わせた。

「この辺りに危険はないかね？」

「あなたがたくらいです。私はここですつと平和に暮らしています」

その言葉を聞いた大人たちに、安堵ともなんともつかない感覚が流れたのをマナは敏感に察知した。皆めいめに持っていた武器を捨てる。

彼のほうも警戒を解いて両者は近づいた。始めに父が包み隠さず身分を明かし、文明があるなら物々交換などを試みたいと申し出ると、彼もそれに応じて情報を提供していった。だがその辺りの話はマナには興味がなく、それよりも母の背後に隠れながら近くで彼の観察をするほうに熱心だった。赤みがかった茶髪は取り立てるほど珍しいものではないにせよ、肌の黒さには目を見張った。生粹に白い父と並ぶとチェスの駒のように対照的だったが、コンプレックスである自分の肌は彼に近い黒さだったので、そんなところで親近感が湧いた。日に焼けた腕は筋骨逞しく、どうしてあんな第一印象を抱いたのかわかりない。細かな年齢は分からないけれども若く

見える。案外父よりは自分と近いかもしれない。

「よかつたら、私の家へどうぞ。そのほうが落ち着くでしょう」

そんな風に段取りがあつて、一行はすぐそばの小屋へ向かうことになった。その小屋を遠目に異様に感じたのは、周りが廃墟の中でたった一軒きちんと建っていたからだつた。

場所を移すことになつて、母がようやく水中の妙なものに気付いた。

「これ、植物ですか？」

至るところの地面に海藻のような紫が幾つも植わつていて、泥状の地面の始まりから彼の小屋まで連続と続いていた。あるところからは少し大きかったり、たわわに実つた果実がついていたり、立派に育つた野菜の形をとつたりしている。一番小さい足下のもは田植えの苗に似ているなどマナは思った。

「はい、私が育てているものです。といつても、海中に植えるだけでおおむね勝手に育つんですが」

彼のさりげない口笛に呼ばれ、どこからか軽快な足音がやつてきた。大人たちは紫の変な植物に随分興味を持ったようだったが、マナの興味が一瞬でそつちへ移つたことはいうまでもない。

「テラだ、よろしくなお嬢さん」

大きな犬に飛びかかれ、マナは派手に水しぶきをあ

げた。

父は「舟」と連絡を取り、一晩帰らないことを告げていた。疲れた体を休ませるのにも、びしょ濡れになつた服を乾かすのにもありがたい。

こんなに広い平地がまだ世界に残っていたことは、大人たちにとつて少なからず衝撃だつたらしい。周囲を調べるのに躍起になつている大人たちを、マナは巨木の下から離れて見ていた。父に朴訥ながら説明を加えている黒い肌の彼を。

彼は数年前に家族を亡くしてから、テラとともに一人でこの何もないうところに暮らしているらしい。少なくとも一昼夜で行けるような近くには集落もないため物資の供給などはできないだろうということだつたが、物資なら「舟」で事足りている。父らが求めているのは「舟」にない新たな物質だとか未知の植物だとかいう貴重さであると知つていた。

巨木はあまりに大きすぎて一帯に日陰を落としており、近くで見ると恐ろしいような気もしたが、見上げると天辺からかすかな木漏れ日が漏れていた。年中この気候なら葉は生い茂つたままなのだろう。「舟」のひ弱な人工樹が何本集まつてもかなわない。隆起した根の一本でさえ、自分が立つてあまりある。両腕を伸ばして樹に抱きついてみるが、何人が並んだらぐるりと囲めるか見当も

つかない。多くの鳥の鳴き声がする。嘔き出して汗が引つ込み、いつもより呼吸が楽だと気付いた。その中に何か分らないけれど気持ちのいいにおいが混ざっている。鼻の先を八チがかすめた。何だか急に胸が苦しい。「懐かしいか」

振り向くと彼が思いがけないそばまで来ていた。

「何ていったの、今」

「懐かしいのかと思っただ」

「どうして。あたし、ここへ来たことなんかないわ」

「母がいつていた。人は皆生まれながらに自然を愛さずにはいられないのだと……たとえ鉄の箱で育った人間だとしても」

鉄の箱というのは「舟」のことだろう。ということは

彼は「舟」を知らないわけじゃない。

「どうしてあなたはこんなところで一人で暮らしているの？舟に乗せてもらえなかったの」

なにげない問いのつもりが、即答は来なかった。居心地の悪い時間が流れかけて初めて彼が呟いた。

「こんなところといったな」

もしかして怒らせてしまったのだろうか。そんなつもりじゃなかったのに。

「ごめんなさい……一人で、誰もいなくて淋しいんじゃないかと思っただ」

恥ずかしくて顔を見られなかった。うつむいてみると、

軽いため息が落ちた。

「一人じゃない、テラがいる。数年前までは親もきょうだいもいた。それにそういう意味だったならいい」

おずおずと上げた自分の顔に、どういう意味だと書いてあったらしい。彼は少し饒舌になった。

「連中は自分たちの舟が一番素晴らしいものと思ひ込んでいるから、ここで暮らしているという大抵侮蔑の目を向けてくる。おまえもそうなのかと思っただが、違うらしい。その樹に臆面なく触れるしな」

正しく意味は取れなかったが、悲しいことと嬉しいことを同時にいわれた気がした。もう一度、幹に耳をあててみた。

「あたし、こんなに大きい樹を初めて見たわ。すごいね。どこまで根が伸びているんだろう。夜になったら動き出しそうよね。水に浸かっているのに腐っていないみたいなのも不思議。不思議というなら、ここに植わっている植物もみんな不思議だわ、水の中で、しかも放っておけば育つなんて。舟に持ち帰ったらみんな喜ぶわ」

伝えたくてもどかしくて、つい早口になってしまって、振り向くと彼はかすかに白い歯を見せていた。彼以外誰もいないその地を見た、最初に最後の笑顔だった。

「おまえは憎めないな」

彼も幹に触れた。それから教えてくれた。

「この樹がどうして腐らないのかは私にもわからない。

だが、小さな植物たちはこの樹があるから育っているのは確かだよ。樹に近ければ近いほどいい作物が育つ。だけどそれも、土壌あってこそだと思っ」

「土壌？」

彼は腰を折って水中深くに手を突っ込み、かき混ぜ、泥をすくい上げて差し出した。顔を近づけたら奇妙に身をくねらせる虫と眼が合い、仰天して飛びすさった。

「植物の成長に欠かせないミミズが、たくさんいるんだ」マナには全く意味が分からず、首を傾げた。

「そんな虫が必要な。土に栄養をあげる薬は作れないの？ ミツバチとか決まった虫を除いて、虫は人間には必要ないって先生いつてたわ。凶鑑には載ってるけど」

彼の笑顔はもう消えていた。眉尻を下げて、とても悲しそうにしたまま、そつと虫を水中に戻した。それを見るとマナも何だか悲しくなった。虫は不思議な動きをして土の中へ泳いでいった。

「それでも、おまえの舟にこんなに広い大地はないだろうね」

彼の視線を追って、広がる水底の碧を眺めた。そこを歩くと柔らかいのだともう知った。水面には曇りない空が透けている。「舟」で海を漂っていると雨の日はかりで、こんなに晴れる日は滅多にない。見渡す限り雨雲のない空など、本当に久しぶりだ。蒼穹が、高い雲が、廃墟でさえ底知れぬ広い鏡の中で輝きを放ち、静かにささやき

合っていた。

「ここは涼しいのね」

木陰は水温も低かった。しゃがんで体を浸かっつてしまつととても心地よかつた。

「星の温度は、まだ上がり続けているのか」

彼からの問いでマナがはつきり答えられるのは、きつとそれくらいだつたらう。

「十一月の平均気温は過去最高を更新したつて。南極の氷はもう残りわずかだという発表があつたわ」

「暑さなんてむかしは気にもならなかつたのに……最近骨身に沁みてきた気がするな」

その言葉は不思議な重みを持ってマナの心に沈んだ。「少し疲れた……人と話すのなんて久しぶりだ」

小屋のほうへ歩いていく彼を追つて黒い犬が畑を横切つていった。もう若くないらしく動きは俊敏とはいえない。崩れている建物の硝子に光が反射してまぶしい。人間の温もりは何もない、ただ荒廃だけがある。なのにひどく胸苦しい。

どうしてあんなに強そうな人を、儂いだなんて思つてしまふのだろう。しかし彼の背中はこの景色に溶け込んでしまつて消えてしまつた。

彼と喋つたのなどただこの短い時間だけがほとんどだつたけれども、マナは絵のようなこの風景を二度と忘れないだろうと思つた。

暮れ方小屋へ引き上げてきたとき、母が袋いっぱいにある不思議な苗を持っていた。

「ママ、それって」

「ふふ、あの人に無理いつてもらったのよ。水の中で腐らずに育つ野菜があるなんて思わなかった。舟へ持ち帰ったら、植物学の研究が進むわ」

科学者である母は新たな発見に生き生きとしていた。

あとでがっかりするのは可哀想だとマナは思った。

「でもそれって、ここじゃないと育たないんだって」

母は怪訝そうな顔で足を止めた。

「どういうこと」

「あの樹があるから植物が育つんだって。あの樹に近い野菜ほどとってもおいしいんだって」

「それ本当？」

「うん。だって、あの人がいつてたわ」

彼との会話を思い出すのに一生懸命だったマナは、そのとき母の表情が変わったのを見逃した。マナの頭をぽんと撫でた母は、すぐさま父たちのほうへ行きかけ、しかしその途中で足を止めた。

「夜は冷えそうよ。暖かくしていなさい」

自分の上着をマナに着せ、先に行つてなさいといつて畑のほうへ引き返していった。海水に漬かりすぎたためか丁度体が冷えていたので、母の温もりは嬉しかった。

大人たちが離れたところで額を突き合わせて何か話しているのを、マナは遠くから見ている。ここに来てからこんなことばかりだ。やがて小屋の彼から声がかかったので、マナは一人で食事をもらい、布団に入ってしまった。野菜を使った料理は今まで食べたことがないくらいおいしかった。そういえば土壌のことをいわないでしまったが、思い出したのは眠りに落ちる頃だった。

胸騒ぎに目が覚めた。あまり眠れていない。夜明けが近いのは分かるが、それにしても鳥の鳴き声がしない。静かすぎる。他の布団は空だった。乾いていた服を着て飛び出すと、まだ暗い中にかすかに言い争いが聞こえた。テラが激しく吼えている。大樹のほうからだ。

「そんなことは許せない！」

近づくにつれ、怒号を発しているのは彼だとわかった。心臓が早鐘のように鳴る。

「だから、君も舟に来ればいい。難民を保護するのも我々の役目だ」

「私は難民なんかじゃありません！それに、そういう問題じゃない。この樹は移植なんかしたら、その途端にきつと枯れてしまう」

移植？ いったい何の話をしてるんだろう。駆け付けたマナはまず付き人の男がいらないことに気付いた。次いで辺りを見回し、その行方を知って青ざめることになる。

男は樹上にいた。隠し持っていたらしい二本のナイフを使い、幹を徐々に登っている。ナイフが幹を削って破片が零れ落ちる度マナは寒気がした。「舟」にありふれた鉛色の防護服は、あまりにあの樹にそぐわない。

「枯れるなどと、どうしてそんなことがわかる」

「あなたがたの舟にこれだけの大地がありますか、星と繋がっている大地が？」

「それこそ養分が豊富な人工土のほうが相応しいだろう。量だつて舟の積載量が許す限り作れる。それに移植が無理ならやはりまず大きな枝の四、五本でもいい、それだけ持ち帰れば有能な化学班がクローンを生み出せる」

「本気で、この神秘なる樹を？ やはり何も分かつてない。そもそもそんな風におもちやにすること自体が許せるものではない。私たちはもう自然に手を出すべきじゃないということがまだわからないのか」

「ではなぜ君は本当のことをいわなかったんだ、あんな植物を持ち帰ったって意味がないということを？」

「マナの心臓はもう、うるさいほど高鳴っていた。その先をどうしても聞きたくない。」

「娘に聞いたぞ。この樹こそが重要だと。我々があの植物を持ち帰って育てたいと進み出たときには何もいわなかったな。黙っていたのは、科学的価値のあるものを独り占めする気だつたんじゃないのかね」

「パパやめて！」

マナは思わず父に縋った。何てひどいことをいうのだ。彼にとつても、自分にとつても。いわないで欲しかった。自分がいわなければこんなことにならなかつたのかもしれないと、既に分かっていたから。

恐る恐る彼を振り返つて後悔した。彼はすぐに顔を背けたが、強い眼に確かに非難の色が浮かんでいた。そんな眼が自分に向けられるのを見たくなかつた。自分たちが傷付けてしまった。彼はただあの樹を愛しているだけなのに。樹を褒めたら笑つてくれた彼は。

父はマナを押しつけて頭上を仰いだ。

「おい、大丈夫か！」

大樹はあまりに巨大だつたため、一本目の枝でさえ地面から遠く離れている。しかし今や男は苦勞してそこへ辿り着き、幹に身体を預けていた。

「やってみます」

「駄目だ、今すぐ降りろ！」

降つてきた声に彼が再び怒号を発す。それに応えるように大きな影が父に飛びかかった。テラだ。父の短いめき声もまたマナを苦しめた。

「この犬め！」

脛に噛みついていたテラを父は思い切り蹴飛ばして、老犬は巨木の幹に叩きつけられた。テラはか細い鳴き声をあげて海水に半身を沈めた。彼に続いて駆けつけようとしたマナの前に、ばらばらと木っ端が落ちてきた。振

り仰げば、下の騒ぎを無視した男がナイフを枝の根元に
あてるのが見えて悲鳴をあげそうになった。

やめて。これ以上傷付けてはいけない。こんなにもう
つくしい樹を。それを愛する彼の心を。

しかし、ガリツといういやな音が夜明けに響いた。

「駄目です、硬すぎて刃が通らない」

「たかが植物なのに？ 構わないわ、もう少しだけなら細
くても。根っこ合わせて十本ほどあればいい」

研究熱心な母の言葉に頷き、男は注意深く身体を支え
ながらじりじりと枝の先へにじり寄る。落ちてしまえと、
マナはそんなことすら頭によぎった。彼の悲痛な制止を
聞いていられなかった。男が先ほどよりやや細身の、そ
れでも人工樹には見られない太さの枝をさすって具合を
確かめる。ナイフが樹皮に食い込む手ごたえに、今度こ
そ男は笑った。マナは直感で悟った。失われてはいけな
いものが失われる。足元の地面がぐらぐらと崩れていく
感覚に襲われた。

「やめろ！」

直後にそれはきた。

どこからか低い鳴動がやってくる。それは静かすぎる
朝を切り裂いて人々を直撃した。「舟」の揺れなど比では
ない、瓶に放り込まれて思い切り振られたような 激
震だ。立っていられない。マナは尻もちをついた。自分

たちのすぐ下に得体のしれない怪物がいる。すぐそばで
ばしゃつという水音がして恐怖に目を閉じた。衝撃が収
まるのを待つしか術はなかった。

一瞬にも数分にも思える長い長い時間が経ち、ようや
く揺れが収まってきた。静けさが戻ってきたとき、目を
開けるとそこに本当の驚きが広がっていた。

一番近くにあつた廃墟の輪郭が変わっている。他の残
骸もそうだ。小屋など半分崩れかけて、寝室があらわに
なっているではないか。遠くではまだ何かが崩れ、水没
する音が生じていた。地形すら変わって大地が顔を出して
いる部分もある。人々はみな茫然として立っていられる
者はいなかった。何事もなかったかのように変わらさず立
っているのは大樹だけだった。樹上にいた男は不幸にも、
マナのそばで蹲つてうめき声をあげている。骨が折れた
のかも知れないが、今構う者もいなかった。

青天の霹靂。その中で真っ先に動けたのは経験によつ
てそれを知っていた者だけだった。彼は腿から鋭いナイ
フを抜き、最も近くにいた者の首にそれをあてた。

「全員動くな！」

放心していた人々の顔が瞬時に強張る。マナは首筋に
冷たい力をあてられ鳥肌が立った。

「といつても動けないだろうな。地震は初めてか？」

「今のが地震だと」
掠れた声は父だ。

「マグニチュード六、七レベルだろうが……たまに、こういうことがある」

彼は一言一言脅すようにいった。「舟」出身の人々の中でその顔に恐怖を浮かべていない者はない。

「どういうときに起こるか、教えてやろう。この樹に危険が迫ったときだ」

そんな馬鹿な、と父が目を見張った全員の代弁をした。「偶然に決まってる」

「私は十年以上ここに住んで何度も見てきた。その前に住んでいたところでも、そういうことはあった。樹を切るうとしたり有害な物質を撒こうとする連中が来たとき、大自然は人間が束になっても敵わない力を発揮する」

「馬鹿な。それじゃ、それじゃまるで」

信じられないように途切れた母の言葉を彼が引き取る。「意識があるようだな、樹そのものに。信じられなくて

も現に説明のつかないことが起きてる」

「そんな……」

彼は、言葉を失った一人一人の顔を殊更ゆつくりと見渡した。

「恐ろしいか。だがな、そのメカニズムが分からなくともあの舟に生きるなら関わらなければいい。誓え。樹には手を出さず、もう二度とここには足を踏み入れないと。でなければこいつを殺す」

マナの首筋を一筋の血が伝った。それがとどめとなっ

て母は研究心を忘れた。未だ信じきれない、信じたくない父の動揺を、付き人の男の痛みによるうめきがかき消す。テラの一吼えが追い討ちをかけた。

「わ、分かった……もうこんなところには近付かない。約束する」

「ならば、そこへナイフも全て置いて、そのままといった場所へ帰れ。そいつも連れていくんだ」

父母はよろよろと腕を折った男を助け起こし、ナイフを全て捨てさせた。

「ねえ、ここへはもう来ないわ。だからマナを放してよ」

「おまえたちが十分離れたと分かったら解放する。先に行け。ぐずぐずすると余震が来る」

恐怖におののいた三人は、もう何もいわずに覚束ない足取りで歩き出した。少し離れてから、母が不安げに振り向く。

「絶対に解放して。傷つけたりしないで」

「早く行け。大地の怒りを再び買ったら、次は人が死ぬぞ」

もう彼らは振り向かなかつた。

長い時間かけて三人の姿が見えなくなつてから、彼は崩れかけた小屋の裏手へまわり、旧式だが浮力のある車にキイを挿した。それからマナに助手席に乗るよう促したが、マナはためらった。

「あの、」

「どうした」

「最後にあの樹に触ってきてもいい？」

彼は作業の手を止めてマナを見た。長い沈黙と短いめ息のあと、急げといった。

水を蹴り上げながら若干進みにくくなった畑をマナは駆けた。初めてここに来たときのように樹を抱きしめ、キスをした。大地は揺れなかった。すぐに踵を返してその場を離れ、助手席に着くのとテラが飛び乗るのが同時だった。低い音を立てて車が動き出した。

夜明けを迎えた廃墟は恐ろしく静かだった。来るときに見たはずの光景も、地震のせいで様変わりしていて同じところを通っているのかすら分からない。頑丈な車でも進めない隆起は迂回し、慎重に進んだ。無言のまま。足下に蹲ったテラが鼻を鳴らして、マナは不意に何かいわなければならぬ衝動に駆られた。

「ごめんなさい」

そういつてから、いわなければよかつたと思った。何をいつても許されない。自分がずるい気がする。彼の返事は果たして素っ気なかつた。

「慣れてる」

それは、何て淋しい言葉だろう。残された時間が少なくなつてみて、マナは彼のことを何も知らないままではいたくなくなつた。

「ねえ、あなたは今までどんなふう生きてきたの？」

不躰だろうかと思いつながら、彼なら答えてくれるのではという勝手な期待があつた。心なしか車のスピードが緩んだ。

「……やはり私たちも、海を渡ってきた。前に住んでいたところは緑あふれる素晴らしい大地があつた。しかし災害が、妹や仲間を離れ離れにした。命からがら逃げて来たこの地で、しばらくは平穩に暮らしたが……数年前、私が遠方へ物資の補給に出かけているあいだ、賊が入つたんだ。そのときに両親は」

一際大きな揺れに言葉は途切れた。

「淋しくないの」

「テラがいる」

呼ばれてテラは毛並みに隠れた目を大儀そうに開け、また閉じた。マナが撫で続けている脇腹は実にゆつくりと上下している。人間ならどれほどの高齡だろう。テラが死んでも、彼はここで生きていくのだろうか。人間はたつた一人で生きていけるのだろうか。

「あなたさえよければ、あたしたちと、一緒に」

結局そういつてしまつた。答えは分かっていたのに。

「親も、そのまた親も、大地の上で死ねと教えた。今更、無理だ」

水底は砂利道を経てコンクリートになり、海水もやがて見慣れた緑色になつた。聞きたいことはまだあつた。

「あの樹が地震を起こしたってほんとう？」
返事は一拍のちに返った。

「嘘だよ」

その言葉の真偽は確かめようもなかった。

陽が昇り始めて、気温もまた暑くなってきた。汗がじつとりと首筋を伝う。ナイフの傷は小さくもう塞がりかけている。道は粗く、浮力にもかき消されない振動が伝わってきてお尻が痛かった。大地にそうされたのだと思っ

た。
いつか見た断崖の少し手前で車は止まった。

「マナは残るか」

彼がどうしてそんな風にいってくれたのか今でも分からない。自分さえ嬉しいのか悲しいのか分からなかった。彼と二人、あの庭で生きていく自分の姿が一瞬で浮かんだ。悪くない。そう思ったのに、身体は反射的に首を振っていた。飲み込まれそうに広大な大地であった二人。それも今更マナにはできなかった。

彼は頷き、ここから歩いて行けるなといった。ずっと遠くに帰るべき家がもう見えていた。

あの地を発つてから数日、母が隠し持ってきた不思議な苗のいくつかを庭にこっそり埋めていた。何日経つても何ヶ月経つても苗は苗のまま、いつしか腐り果て、残骸は庭の隅で忘れられていった。

マナはしばらく野菜が食べられなくなった。何を食べてもまずいとしか感じられなかった。

あのような場所も以来二度と見つからなかった。しかし大樹と地面でくすんだ碧い大地は、今もマナの脳裏に焼き付いたまま離れない。佇む儂い彼とともに。